様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　5 月 30 日現在

機関番号：11101
研究種目：基盤研究（ C ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21592845
研究課題名（和文）　親である壮年期男性における生活習慣改善に資する
親性活性化プログラムの開発
研究課題名（英文）The development of a lifestyle modification program aimed at revitalizing parenthood: A focus on men in early adulthood with children.
研究代表者
古川　照美（KOGAWA TERUMI）
弘前大学・大学院保健学研究科・准教授
研究者番号：60333720

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、「親性」を活性化することによる生活習慣改善プログラムの開発に示唆をえることであった。幼児から中学生の子を持つ親に対し調査をし、その上で介入プログラムを実施した。親性、生活習慣、子どものかかわりは、介入群が高かったものの、有意差は認められなかった。親性を高めるプログラムの再構築と検証が必要である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine whether a newly developed lifestyle modification program helped revitalize “parenthood.” First, an examination was conducted for parents with children ranging from infants to junior high school students. Moreover, an intervention program was carried out. The scores of the intervention group on the variables of parenthood, lifestyle, and parents’ attitude toward child rearing were higher than those of the control group were. However, the differences were not significant. Therefore, this program needs to be reconstructed and its effectiveness needs to be verified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学、地域・老年看護学
キーワード：生活習慣病予防、親性、QOL

１．研究開始当初の背景

生活習慣病は、わが国の死亡原因の約 6 割、医療費においては約 3 割を占め、医療経済も含めた国勢にかかわる重要課題である。生活習慣病の中でも特に、心疾患、脳血管疾患等の発症の重要な危険因子である糖尿病、高血圧症、脂質異常症等の有病者やその予備群が、働き盛りの壮年期である世代の男性において増えている。

壮年期は不健康な生活習慣であっても、健

康状態に影響されない時期であり、それ故長く不適切な食生活や運動不足等の不健康な生活習慣が継続される可能性が大きい。また、壮年期男性は、喫煙率が高いことも危惧される。男性の健康への関心は、どの世代においても女性より低く、健康的な生活は、40代男性では1.6%と非常に低い。壮年期男性は、健康への関心も低く、生活も不健康であるという実態がある。

一方で、壮年期の働き盛りの世代はいわゆる子育て最中の親世代でもあり、発育成長過程の子どもと同居している場合が多い。子どもは親の生活習慣に影響を受けざるを得ない環境下にあり、壮年期である親世代からの生活習慣が子どもに継承され、子どもの生活習慣が形成される重要な時期にもあたる。

２．研究の目的

本研究では、親になることにより発達する人格的特性である「親性」を活性化させることにより、壮年期の親世代の生活習慣の改善及びQOLの向上と親子の健康の保持増進に役立つプログラムの開発に示唆を得ることを目的とした。具体的には、(1)親性の発達と生活習慣の関連について検討し、親性活性化因子を同定する。(2)親である壮年期男性の健康管理能力と親性、親心の関連について検討する。(3)親性を活性化させるプログラムを開発、実施し、プログラムの評価を行う。評価の際には、不健康な生活習慣であっても、健康状態に影響されない壮年期男性である対象の特徴に鑑み、基本的な人間の生活側面が反映されるWHO/QOL-26を用い、検討する。

３．研究の方法

(1)親性の発達と生活習慣、QOLの関連に関する研究

①研究対象

A町において、2009年6月から2010年3月までに実施された1歳6か月児健康診査、2歳児歯科健康診査、3歳児健康診査、4歳児健康相談の対象幼児の親及びA町立の3つの小学校に在籍する児童の親1,232人であった。

②調査内容

調査内容は、性別と属性(年代、学歴、配偶者の有無、子どもの数)、「親性」尺度（15項目)、WHO-QOL26、親の生活習慣(10項目)と子どもへの健康配慮項目(14項目)及び食事配慮項目(13項目)であった。

③分析方法

各調査項目を得点化し、子どもの数、第一子の年齢区分別では、Kruskal-Wallis検定、性別ではMann-WhitneyのU検定、親性得点と各項目得点との関連をSpearmanの順位相関係数で検討した。さらに、親性得点の高低群の2群に区分し、各項目の得点をMann-WhitneyのU検定で比較した。

(2)親である壮年期男性の健康管理能力と親性の関連に関する研究

①調査対象と調査内容

B町において、2010年8月から2010年12月までに実施された1歳6か月児健康診査、3歳児健康診査、4歳児健康相談の対象幼児の両親57組に対し、親性尺度と健康管理に関する項目について調査を実施した。

②分析方法

健康管理ができる群、できない群において、親性得点についてMann-WhitneyのU検定で比較した。

(3)親性活性化プログラムの開発と評価に関する研究

①調査対象と調査内容

A町立の中学校4校に在籍する生徒の両親1,180人に対し、1)と同様の調査を実施した。

②介入プログラムの実施

介入プログラムの実施の前に、対照群、介入群ともに、子ども対象の生活習慣病予防健診(身長、体組成、骨密度、血圧、血液検査(貧血・脂質・血糖・肝機能等)及び生活習慣(食事、運動、生活リズム)の調査を実施した。それらの結果をもとに、両群の子どもと親に対しては、文書にて結果説明と個々人の生活習慣アドバイスを配布した。また、両群の子

どもに対しての生活習慣病に関して、及び食事に関する健康教育を実施した。

介入群への介入プログラムとして、子どもの生活習慣予防健診の結果についての保健指導を親子一緒の面談にて実施した。面談の際には、親の生活習慣病への関心を高めるために、非侵襲性の健康チェック(血圧、体組成、骨密度、四肢血圧の測定)も同時に実施した。

③分析方法

介入群、対照群において、親性得点、生活習慣得点、子どもの生活習慣配慮得点について Mann-Whitney の U 検定で比較した。

④倫理的配慮

本研究は、弘前大学医学研究科倫理委員会の承認を得て実施した。対象者に対してプイバシーの保護、調査の趣旨等を書面及び口頭で説明し、封書で調査票及び同意書を得た。

４．研究成果

(1)親性の発達と生活習慣、QOL の関連に関する研究

1歳から11歳の子どもを持つ親における親性得点は、父親 11.4 点、母親 10.8 点と父親が有意に高かった。WHO-QOL26 の領域 QOL 値別では、父親が心理的領域で有意に高く、社会関係は母親の方が高かった。生活習慣得点、子どもへの健康配慮得点、食事配慮得点は、母親の方が高かった。父親、母親とも親性得点と生活習慣、子どもへの健康配慮、食事配慮に正の相関が認められた。また、父親、母親とも親性得点と WHO-QOL26 のすべての領域 QOL 値において正の相関が認められた。

子どもの数、第一子の年齢区分別には、有意差は認められなかった。子どもの母親の親性高得点群の生活習慣、子どもへの健康配慮、食事配慮、領域 QOL 値すべての得点は、低得点群より有意に高かったが、父親の親性高得点群は、生活習慣、領域 QOL 値すべての得点は低得点群より有意に高かったが、子どもへの健康配慮、食事配慮得点に有意差は認められなかった。すなわち、母親では、親性高得点群の方がより良好な生活習慣を有し、子どもへの配慮、自身の QOL も良好であったが、父親では親性と自身の生活習慣および QOL の関連が認められた。

母親では、親性と親自身の生活習慣や QOL、子どもへの健康・食事配慮と関連が認められ、親性を高めることが親自身の QOL の向上及び親子の良好な生活習慣につながる、あるいは、子どもの生活習慣への配慮を促すことや自身の生活習慣を良好にすることが親性を高めることにつながる可能性が示唆された。一方、父親では子どもの健康・食事への配慮や関心を促すより、親性を高めることにより、自身の生活習慣を良好にする、あるいは QOL を高めることにつながる可能性が示唆された。

(2)親である壮年期男性の健康管理能力と親性の関連に関する研究

父親母親で親性得点、自身の健康管理に差は認められなかった。また、父親母親とも親性得点と属性に差は認められなかった。自身の健康管理の有無の二群について、親性得点、および親性尺度の下位項目について比較したところ、父親は健康管理できる群が親性得点および下位項目８項目について有意に高く、母親では下位項目の「必要とされる存在」のみについてだけであった。親である壮年期男性の健康管理能力を高めるためには、親性を高める支援が有効であることが示唆された。

(3)親性活性化プログラムの開発と評価に関する研究

介入群、対照群ともに回収率、性別の比率に差はなかった。また、親性得点、生活習慣得点、子どもの生活習慣配慮得点は介入群が高かったものの、有意差は認められなかった。介入プログラムが親性を高める、あるいは親自身の良好な生活習慣に影響を与えるまでに至らなかったと思われる。

しかしながら、(1)、(2)の研究結果により、父親、母親ともに、親性と親自身の生活習慣

やQOLとの関連や、特に父親に関しては、親性を高めることと健康管理能力に関連が認められたことから、親性を高める更なるプログラムの再構築と検証が必要である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①倉内静香,西村美八,古川照美: 幼児の親における健康管理認識と子どもへの生活習慣配慮との関連, 保健科学研究,2,45-54,2012.査読有

②古川照美, 西沢義子: 親子関係と生活習慣の関連　-中学生における親子関係診断検査から-,小児保健研究, 70(2), 262-269,2011.査読有

③古川照美,倉内静香,西村美八,梅田孝,中路重之: 親である壮年期者の生活習慣と QOL、疲労蓄積度の関連, 体力・栄養・免疫学雑誌,20(2),84-86,2010.査読無

〔学会発表〕（計７件）

①古川照美,西村美八,倉内静香,檀上和真,高橋一平, 松坂方士, 梅田孝, 木田和幸, 中路重之:中学生の部位別体脂肪率と生活習慣の関連-青森県津軽地域と南部地域の比較ー,日本公衆衛生雑誌,58(10),252,2011.

②倉内静香,古川照美,西村美八,檀上和真,高橋一平, 松坂方士, 梅田孝, 木田和幸, 中路重之: 青森県津軽地域と南部地域における中学生の生活習慣の比較, 日本公衆衛生雑誌,58(10),252,2011.

③ Nishimura M, Kurauchi S, Kogawa T,Takahashi I: The Relationship between QOL in Married Couple Taking Care of a Child, The 2nd Japan-Korea Joint Conference on Community Health Nursing,131,2011.

④ Kogawa T, Nishimura M, Kurauchi S, Takahashi I, Umeda T, Nakaji S: Correlation between Health Self-Management, Parental Development, and Parental Affection of Men in Their Prime who Have Children, The 2nd Japan-Korea Joint Conference on Community Health Nursing,134,2011.

⑤ Kogawa T, Kurauchi S, Nishimura M, Takahashi I, Nakaji S: Correlation between the parent-child relationship as recognized by parents a nd the growth characteristics and lifestyle of children, 10th International Family Nursing Conference,233,2011.

⑥T Kogawa, S Kurauchi, M Nishimura, I Kashiwakura: The characteristics of reactive oxygen metabolites detected in the serum of early Japanese teenagers, J Epidemiol Community Health, ,65,2011.

⑦古川照美, 西村美八, 倉内静香,木田和幸,梅田孝,中路重之: 母親の親性と生活習慣、QOL、子どもの健康・食事配慮の関連, 日本公衆衛生雑誌 57(10),315,2010.

６．研究組織

(1)研究代表者

古川　照美（KOGAWA TERUMI）

弘前大学・大学院保健学研究科・准教授

研究者番号：60333720

(2)研究分担者

倉内　静香（KURAUCHI SIZUKA）

弘前大学・大学院保健学研究科・助手

研究者番号：60455730

西村　美八（NISHIMURA MIYA）

弘前大学・大学院保健学研究科・助教

研究者番号：00436015

木田　和幸　（KIDA KAZUYUKI）

弘前大学・大学院保健学研究科・教授

研究者番号：60106846

中路　重之　（NAKAJI SHIGEYUKI）

弘前大学・大学院医学研究科・教授

研究者番号：10192220

梅田　孝　（UMEDA TAKASHI）

弘前大学・大学院医学研究科・准教授

研究者番号：50311535